

死刑台へどうぞ

死刑台へどうぞ

ポケット文春 122

1963年10月20日 初版発行

定価 200円

著者 あす飛 か鳥 たかし高 ©

発行者 小 野 詮 造

発行所 文藝春秋新社

東京都中央区銀座西8ノ4

印刷 大日本印刷
製本 加藤製本

落丁・乱丁がありました場合はお取りかえします

死刑台へどうぞ

推理長篇

飛鳥高

文藝春秋新社

目次

第一章	男と女	5
第二章	一人の女	23
第三章	絵と小説	64
第四章	男と機械と女	104
第五章	過去の男	139
第六章	民と檻	169

カバー写真 林田重男

第一章 男と女

1

幅五メートルばかりの舗装した灰黒色の道が真直に延びていた。

道の左側には塀が連って、所々に門があった。右側は、少し小高くなって、石垣が積んであり、その白い御影石に朝日が当たっていた。石垣は南を向いているのであった。

男と女
空は晴れていたが、その青さは白くぼんやりと濁っていた。塀の影で縦に半分に切られた道には、人の姿

もなく、あたりはひどく静かであった。見える全てのものの姿は、明るくはつきりとしており、そして、じっと動かなかった。

石垣を斜めに切って緩い勾配で登っている道があった。黒いズボンに赤いセーターを着た久保がその道を登っていた。油気のない髪が濃い眉の上に垂れさがり、浅黒い細い顔にも思わしげな影を作っていた。彼は眩しそうに眼を坂の上に向けた。

石垣の上に、四角な灰青色の建物があった。コンクリートのブロックを積み上げたその家は、ひどく不細工な姿で無遠慮にそこに坐っていた。それは眼の前の家並と太陽に、冷たい敵意をもって相対しているようであった。

坂の上に沈んだ花の木が大きい球のような形をして植わっていた。花はまだ蕾で、ほんの僅かし咲いていなかったが、幽かな匂が漂っていた。久保は、訝しげな眼を花へ向けた。

ブロックの家の端の所に理髪に行ったばかりの頭を

した血色のいい男が立っていた。

男は満足感を隠すように顔をしかめて太陽の方を向いていた。赤いコートの上に白いレースのショールを掛けた女が、ドアに鍵をかけていた。彼女は、ノブを握ってドアが動かないのを確かめると、ショールを直しながら男の方へ歩いて来た。男は歩き出した。

久保とすれ違う時、女は視線を流した。

——また来たわ。

——そうさ、また来たよ。

久保の眼は答えた。

——あの得体の知れない女の所へ。

——平和な君達には関係のないことだよ。

女はまた、ショールを直して、夫と並んだ。

久保は、家の向う端にもう一つあるドアの所へ行ってベルのボタンを押した。それから、その横に置いてある血色の真新しい乗用車の方に向いた。車体は滑らかに輝いていた。

彼は腰をかがめて、口づけをするように顔を近づけ

た。その瞳は、車体と同じように生き生きと輝いていた。ガラスに映ったその顔は、満足げな類笑みを浮べた。

ドアの開く音がした。

久保は、微笑した顔をその方へ向けた。女は、白い薄いネグリジェを着て、無表情な眼を向けていた。久保は中へ入った。

部屋には、大きく開けた南側の窓から光が眩しく射しこんでいた。窓の左右には白いレースのカーテンがあった。投げ出してある雑誌をよけて、久保はソファに腰をおろした。低いテーブルの上にテープレコーダーが置いてあった。

「始めたの」

と久保は尋ねた。

女は隣室の部屋で化粧を続けていた。間のドアは開いていた。

「始めようとしたんだけど——」

女は髪をすいていた。

「うん」

「出だしは、スムーズにゆかないわ。いつもそうよ、わたし」

「どのくらい、行った？」

久保はテープの方を調べるような視線で見た。

「ほんの僅かよ。テープレコーダーだと、読み返すのが面倒ね。書いた方がいいかしら。でもわたし、書くとすぐ手首が疲れるの。手が弱いからね」

「馴れないからさ」

「そうね」

「できたら、どこへ持って行く」

「やっぱり、あそこにしようかしら」

「ふん——」

久保はソファに背を伸してタバコを出した。

「でも、これは絶対売れるわ」

「ふん。どんな話？」

「中年の一人の男の話よ」

「どんな」

女は暫く黙っていた。髪にブラシをかける音が続いた。やがて女は、独り言のような調子で喋り出した。

「有力な代議士の選挙のために華々しく活躍した男が、その選挙の違反事実が明らかになるに従って、皆から責任を一人に被せられてだんだん孤独になって行くの。最後に殺されるの。その死体になった所から話を始めるのよ」

「ありそうなテーマだな」

「あった？」

「知らないけど」

「男の殺された事情が明らかになるに従って、社会のどうにもならないいろんな事実や、思いがけない結び付きが出てくるのよ」

「社会派だな」

「そうじゃないわ。哀れで汚ない人間を書くのよ。一番大事なのは、これを現実の人物や機構にあてはめて書くのよ。売れるわ、きっと」

「問題を起すぜ」

「その方がいいわ」

「出版社が躊躇するかも知れない」

「そうでもないわ」

「僕はあの編集長をよく知っている。僕から頼んでもいいよ」

「頼むわ。きつと売れるわよ」

「作家になるんだな」

「久男は作家にならないの」

久保は返事に困ったように瞬きをした。

「書いてる？」

「——ああ」

「どんなの？」

「若い男と女の話だよ」

「わたし達みたいなの？」

「——そう」

「どっちかが死ぬの」

「——うん」

「どっち？」

「女さ」

「なぜ？」

「男には、女から愛されているという証拠を掴むことができないからさ」

女がドアの所に現れた。女の背丈は男と同じ位であった。堅そうな髪が大きくひろがって、眼も鼻も大きかった。女は男の傍へ寄ると見下すようにして立った。男は、女のその張った腰に、何か思い出そうとするような視線を向けていた。

「なぜ愛されていることが分らないの」

女は、その体を一層男の顔の方へ近づけた。男はまばたきをした。

「もともと男は、女に愛される必要はなかったんだな。多分そうさ。女は男に愛される必要があるけど」

「どうしてそうなの？」

「女は自分の体の中にある卵子に活動を与え、できた小さな生命を安全に育てる為に、男の愛情を必要とする筈だ。そして卵子に活動を与えてくれたということ

で、男の愛を確認することが出来る。だけど男は、その役目を果たすために女の愛を必要としない。だから神さまは、男に女の愛を確かめる方法を与えてくれなかったんだ」

「そんなら、それではいけないの」

「だけどさ——」

と男は女を見上げた。

「いつの間にか、男も女に愛されたいと考えるようになった。これは確かに何かの間違いさ。そして女の愛の証拠を掴もうとする。これは恐ろしく難しいことだよ」

「あなたにはできて？」

男は弱々しく微笑した。

「男の愛が、女の細胞に活動を与えることなら、女の愛も、何か男に与えることでなきゃならないだろうな。それは何かと言うと、神さまも予定してなかったことなんだから、多分何か人工的なものだろうね」

女は男の傍を離れ、隣の部屋へ入った。

「お金なら上げられるわ」

女はネグリジェを脱いでベッドの上に投げると、衣類戸棚を開いた。幾つもの服が下っていた。女はそれを選んでいた。

裸の女の肩に男の手が触れた。女はその手に眼を落して、嘲るような微笑を浮べた。それから眼を閉じると男の胸に背をもたせかけた。

2

ドアを閉めると女は鍵の束をハンドバッグへ入れた。イグニション・キーは別になっていた。女はハンドルの前に乗りこんだ。久保はその横に坐ると眩しそうな眼をして前を見た。

車が走り出すと彼は紙袋からハンバーガーを出して囙った。一口囙るとそれを女の口へ持って行った。

「いらぬわ」

女は顔を反らして前を見ていた。

「あのあと、いつも何か食べたがるのね」

「腹が空くよ」

女は嘲るように小さく笑った。

灰黒色の道の遠くを人が歩いていて、車は問もなくそれを追い抜いた。久保は犬を連れたその老人へ落着かない眼を向けた。

車は住宅の多い地区から抜けると電車の通っている道路へ出た。女はそこでガソリンスタンドへ車を入れた。二人は車をおりた。

久保は給油器のメーターがくるくる回るのを熱心な眼差しで見っていた。

「代ろうか」

給油がすんだ時久保は言った。

「いいわよ。どこへ行くのか知らないでしよう」

車が動き出すと、久保はドアの方へ体を寄せて、物珍しそうに女を眺めた。女は淡い緑色のスカートに紺

のカーディガンを着て、頭に花模様の入った淡茶のネッカチーフをかむっていた。

車は都心へ向っていた。二人は言葉を交さなかった。やがて渋谷から環状線の中へ入った。道路は何処まで行っても混んでいた。そしてその流れを信号機が、意地悪くひっきりなしに遮断した。

道路は傷つき、曲っていた。その上の空気は埃を含んで濁っていた。久保は、ダッシュボードの上に薄く積った埃を、指で注意深く左右へ動かしていた。

車は長い時間かかって、都心を横切り、東北の地区へ出た。所々にあまり大きくないビルのある、低い家並の道を走った。街の風景はいつまで行っても同じようであった。

やがて女はハンドルを右へ切って、左手にコンクリートの板を重ねた灰色の塀のある道へ入った。コンクリートの塀は、太陽を受けて静かに真直に続いていた。四角なコンクリートの門柱があった。大きい鉄の格子扉が閉っていた。門柱には白い磁器の板が嵌めこん

であつて、それには黒く《隅田コンクリート工業株式会社》と書いてあつた。女はその前で車を止めると、クラクションを鳴らした。久保は門柱の名札を気の進まない表情で見つめていた。

引きずるような足音が中から門へ近づいて来た。葉服を着て、銀縁の眼鏡をかけた老人が格子扉の所に現れると、両手で格子を掴んでじつと車の方を見つめた。

女は、フロントガラスからそちらへ顔を向けていた。年寄りの短く刈つた髪は銀色に輝いて、寄せた眉の間に、まるで傷跡のような深い皺ができていた。

年寄りは扉の門かどを外すと、扉を一枚ずつゆつくりと左右に押し開いた。女はハンドルを回しながら車の中へ入れた。久保は、車の通る横に立っている年寄りの顔を興味深そうに見つめた。

門を入つた左手に事務所らしい建物があつた。その前に車を止めると、女は降りて、年寄りの所へ行つた。二人はそこで二言三言、言葉を交した。年寄りは頭を

小さくゆつくり何度も頷かせた。

車を降りた久保は二人と反対の方を向いていた。広い敷地であつた。彼の前には、コンクリートの管が、幾つも並べて置いてあつた。管の径は、人が体をかがめて通り抜けられる位であつた。

きちんと行儀よく並べられた管は、その内面と隣りの管に、くつきりとした規則正しい影を作つて、何処までも続いていた。久保は頭の上に両手をのせて、あちこちに視線を移していた。工場か倉庫のような大きい屋根の建物が、幾つか建つていた。女が近寄つて来た。

「何だい、こりゃ」

久保は尋ねた。

「工場よ。コンクリートでいろんなものを作つてるのよ」

「今日は日曜で休みなんだな」

「そう」

「ここで何をするんだ」

「見るのよ」

女はハンドバッグから小型のカメラを出して、シャッターを切った。

「ここを書くのか」

「そう——」

女は先に立って歩き出した。地面はすべて白い硬いコンクリートで被われていた。

二人は管の並んでいる前を通った。久保は体をかかめて管の一つを通り抜けると、反対の端を女と平行に歩いた。管を通して二人は顔を見合せた。二人は微笑した。

「きれいなね。こういう無機質の物体が並んでるのって——」

声が管の中に反響した。

「——同じ無機質でも、海岸にある色んな形をした岩なんか、これに比べると、なんか一生懸命芸をしているみたいだわ」

女は立ち止って、カメラを構えた。久保は、管の向

うでこちらを狙っているレンズに向って、眼をむいておどけた顔を覗かせた。そして、子供のようにケタケタと笑った。笑い声が反響した。

管の隣りには、電柱らしいコンクリートの長い柱が、下に角材を敷いて並んでいた。

「ここを何に使うんだい。活劇かい」

「違うわ」

「でもアクション場面にいいかも知れない。それも真昼間だな」

「わたし、そんなの書かないわ」

「じゃ、何にするんだ」

二人は管の向うとこちらで話しながら進んだ。管の列がなくなった時、地面もなくなっていた。その向うに、荒川が、大きく曲って流れていた。

岸に木造の舟が二隻ついていた。舟には腹一杯の砂が積んであった。一隻は卸しかけらしく、岸から短いベルトコンベヤーが渡しかけてあって、砂に二本のシヤベルが突き立てられたままになっていた。

二人は川の方を向いてコンクリートの電柱に並んで腰をおろした。水は黒かった。向う岸のあちこちにあら煙突からは、煙が出ていなかった。川の真中を、発動機船が伝馬船を一艘引っぱって上っていた。

「今、書こうとしてるやつか」

「そうよ」

「どんな話さ」

「主人公の工場にするのよ。選挙の好きな主人公よ。衆議員選挙の会計責任者になるの。そして区会議員よ。その人の経営してる工場よ」

女は、振りがえって見回した。

「——この通りに、あるがままに書かなきゃならないわ。何もかも——。勿論主人公も金を出すわ。ほかからも金が出るわ。何しろ大物の選挙なんだから。主人公は大はりきりよ。それから選挙がすんで大物は当選して、しばらくたって、検察庁が動き出すのよ。主人公はだんだん追われ、孤独になって死ぬ——」

「それじゃ、話の筋も犯人も分ったようなもんだな」

「でもそれを逆に書いて行くのよ。社会の片隅の、ある身元不明の男の死から——」

「そんなの誰か書いてないかな」

「わたしのは、ドキュメンタリーなのよ。すごく——」

女は、細くした眼を川へ向けた。

「面白くなるかな」

「なるわ。ここへも警察が調べに来るのよ。ここへ出入りしたいろんな人物の姿が、だんだん浮き上ってくるのよ」

「とにかく早くでき上ったのが見たいよ」

彼は足元の石を拾って川へ投げた。水の面に波紋が拡がった。彼の興味は、女の話からその波紋へ移ったようであった。

女は暫くすると、黙って立ち上って歩き出した。久保はその後に従った。どこにも人の影がなかった。地面には、いろんな型の製品が、同じ灰白色の面に太陽を受けて、行儀よく並んでいた。

建物の扉は皆閉っていて、鍵がかかっているようで

あった。扉の上には、その建物のナンバーを書いたプレートが付けてあった。

二人は敷地の端まで行って、門の方へ足を向けた。事務所の前に黒い人影が、ぼつんと一つ立っていた。二人の方を向いているようであったが、距離が百メートル位あるので、顔立ちなどははっきりしなかった。黒っぽい服を着た、ずんぐりした中年の男のようで、額が光って見えていた。

二人が事務所の建物の近くまで来た頃、その男の姿はなくなっていた。二人は事務所の後側に沿って歩いた。木造の平家で、どちらかと言えば粗末な建物であった。窓ガラスの内には、沢山の机の並んだ、ありふれた事務室になっていた。

隅の所に、ほかとは違ったカーテンの垂れた部屋があった。特別の部屋のように見えた。

「こういう会議室みたいなところで打ち合せをするわけよ」

と女は言った。

「——料理屋さんなんかでみんなが集まると目立つから、こういうところで謀議をめぐらすのよ」

「小説の話かい」

「そうよ」

二人は事務所をひと回りして門の前へ出た。先程の年寄りが事務所の中から出て来た。女はその方へ行つて、礼を言っているらしく、頭を下げた。

女は車の所へ戻ってくると、もう一度何となく工場全体を見渡した。

「大体分ったわ。わたしまだ一度も来たことがなかったの」

そして久保に向つて言った。

「運転を代ってよ」

「よし来た」

二人は両側から乗つてドアを閉めた。久保はギヤを入れかえてバックさせ始めた。年寄りが事務所の前に立って見送っていた。ずんぐりした男の姿はそこいらに見当らなかった。

「どこへ行くんだ」

「もう一カ所見たいところがあるわ。鶴沼へやって頂戴」

「よし、鶴沼だな」

久保は、何か悪戯を始めるときのような表情で答えた。

3

江ノ島がすぐ傍に見える海岸沿いのドライブウェイから、車は住宅街の中へ曲った。曲るとすぐ、疎らな松林の中に、綺麗なコンクリートの建物があった。玄関の前が広く開いて、そこにもひよろつとした松が、二、三本立っていた。

その松を回って、車は広い庇の突き出た玄関に止った。久保は車をおりると、なんとなくあたりと空を眺めた。玄関の上の所に、『名商株式会社鶴沼寮』とい

う金属の文字が並んでいた。

久保は、女が何をする積りか確かめるように、その方へ視線を向けた。彼女は黙ってドアを押して中へ入った。久保は少し遅れて中へ入った。床には白い石が張りつめてあった。ホテルのフロントに似たカウンターがあった。女はそこで話をしていった。

久保が近づくと、女はカウンターを離れた。女と話していたのは、青い背広を着た、顔のまゆのように長い初老の小男であった。彼は小さな眼で、久保を見ていた。

玄関ホールに続いてロビーのような所があった。椅子やテーブルが幾つか並べられ、広いガラス戸で庭に面していた。

庭には芝生が張りつめられ、石が配置してあった。低いブロック塀があり、海は見えないが江ノ島が見えていた。

ロビーの隅にテレビがあつて、女を交えた三、四人の者が、それを見ていた。二人は、庭に近い椅子に腰